自信のない保母

牛島義友

「あなたは子どもの保育に自信がありますか」と聞かれて、「はい」と胸を張って答える人が果して何人いるでしょうか。多くの保母さんたちは自分の仕事の尊さを感じながらも、毎日の保育に不安を持ち、こうしたら純心な幼なごの心を傷つけやしないかとか、あの場合にはこのように指導すべきではなかったとか、絶えず思い悩みながら仕事を続けられていることでしょう。

しかしこの自信のない姿は困った状態でしょうか。否、私はこのような保母さんに対して却って心からの親しみと尊敬が持てるような気がします。世の中に自信のあるお母さんが果しているでしょうか。どんなに教育があり育児の勉強をした人でも、さてわが子を育てる段になると自信がなくなるものです。一家の中には子供を育てることに自信のある人もいないことはありません。祖母たちは孫の教育には自信を持っております。自分の子供を何人か立派に育てあげたのですから孫の教育ははるかに自分の方が専門家だと思っている人も多いようです。しかしこの祖母たちが、果して子どものよい養育者といえましょうか。またこのようなお姑さんを持った若い嫁の立場は考えただけでも気の毒でたまりません。どのお母さんも自分の幼い子どもたちを育てることははじめてのことであり自信など全然持たずに絶えずあれこれと思いわずらいながら、ただ子供のためにひたむきになっている人たちです。万一子供の教育に自信があるという若いお母さんがあれば、それは無知の上の大胆さから出たものか、或いは子どものことを真剣に考えていないお母さんでしょう。

ですから保母さんたちが保育に自信がないことにも同じような態度がみられるのではないでしょうか。

全然保育の勉強もせず準備もないために自信がないという

人もあるかもしれません。しかしこのような人は問題外です。一応の保育の勉強をし保母としての訓練を受け真剣に保育に打ちこんでいて、なおかつ自信がないという保母さんのことを今問題としているのです。このような場合に自信がないということはその人の知識や経験が不足しているというよりも事にあたる真剣な態度が大きな原因ではないでしょうか。よい加減にするという態度の時は不安も生じません。子供のちょっと元気のない姿から重大な疾病の徴候を見ることのできる人、子供の言葉や子供の描いた絵の中からでも子どもの心の問題をうかがい知ることのできる人、子供の態度が変っていることにすばやく気付くことのできる人ほど子どもの問題に強い不安を感ずるでしょう。また子供を単なる預った子ども、何十人の園児のうちの一人としてみるのではなく、我が子に対するような関心を寄せる人、この一人の教育にあやまったならば、たとい他の多勢の子供たちが順調に育ったとしても取り返しのつかない大きな失敗と感ずる人ほど保育に自信が持てない保母さんとなるでしょう。

このようなことはなにも保育だけではないかもしれません。研究をするにも創作をするにも或いは事業を行うにもいつも同じでしょう。研究者が研究に自信を持ったころには大して偉大な研究はできないものです。このような人はたしかに大きな研究を手ぎわよくまとめたり、多ぜいの研究者を動員してまとめていくようなことは間違いなくできるでしょう。しかし真に学者の独創的な力を発揮した研究はこのような綜合研究からはなかなか生まれてきません。新しい理論を展開したり新発見をしたような科学者はその年齢からいっても先ず二五才から四〇才くらいまでの人です。このような人が果して自信をもって自分の研究を逐行できるものでしょうか、社会的にもまた無名な時代に、また師によって教えられたり手引きされることもなく、単身で未開の分野につき進んでいった人たちです。ものになるかならぬかの見当もなく必死に打ち込んだ鍬の先から新しい真理が生まれてくるのです。事業家たちも絶えず自分の全財産を賭して仕事に当っておりましょう。この一か八かの生活には自信などはなかなか湧いてこないものです。毎日の仕事に精魂をうちこんでいる人は自信から程遠いものです。

このような不安のうちに真剣な努力を続けている人も、十年、二十年と同じことを続けているとたしかに自信がついてきます。少なくも仕事をするのに大して努力が必要でなくなるし、しかも見事な成績をあげることができます。前の日おそくまで準備をしてもなお足りなかった保育も準備なしにいきなりやれるようになるし、仕事のために使うエネルギーは比較にならないほど少なくなります。しかしこのように仕事が楽になったと思っているうちにいつとはなしに自分が子供

たちから置き去りにされていることに気付くでしょう。自分は名教師となったつもりでいるのに、生徒たちは十年一日の如き陳腐な講議をしていると冷笑する場合も少なくありません。若い頃は講議は下手だったけれども熱があって学生たちをひきつけていたが今日はそつのない名講議ができるけれども学生がいっこうについてこないことを嘆く老教師も少なくないでしょう。教育はただ言葉や技術だけでなく、その奥に流れる教育的熱意や気迫が大切なように思われます。

自分の仕事に自信がついた頃には自分の仕事の進歩が止ったことに気付くでしょう。その仕事が絶えず進歩している人はいつも自信のない不安にかられている人といってもよいでしょう。勿論同じことを何年繰り返してもいっこうに進歩がないということは困ったことではあるし、そのような人は無能な人です。仕事が進歩することと自信がでるということとは別のことではないでしょうか。一つの仕事がある程度進歩した人は次の問題と取っ組んでおるべきであるし、その問題が解けたとしても、まだ、自分がしなければならない問題が数多くあることに気付くでしょう。否、一つの仕事を完了し、一定の段階に上昇した人ほど新しい問題に気付きます。ニュートンは自分のした業績を海岸に無数にある真砂の一粒にすぎないと申しましたが、これは単なる謙遜というよりも、彼が最も多く未知の問題を見渡すことができたためでしょう。絶えず向上する人こそ常に新しい不安に悩んでいます。

最後にひとりで歩く人ほど自信がないものです。母親に手引かれている嬰児、教師の指導のもとで勉強している子どもには不安はありません。自分で独立し、未知の世界を開拓する人ほど自信が持てないものです、園長の指導のもとでいわれるままに動いたり、講習で習った保育技術をそのまま真似しているような人にはそれほど不安はないでしょう。今日保母さんたちはもっとも熱心な講習会マニアであり、彼女ほどなにかを吸収しようという意欲の強い教育者はありません。保育に自信がないためにこのような機会を逃さず向上しようとすることは大変結構なことではあります。しかしここに大きなわながあることにも気付く必要がありましょう。新しい音楽指導、新しい製作を教えてもらうためだけに講習会通いをするとしたらやがては講習会に出たり、研究会に行かなければ来年の保育ができないという依存的な保母になる危険もあります。自ら考え、自らくふうする人でなければよい保育者とはいえないでしょう。製作にしても教材にしても指導法にしても保育界にはくふうする余地は無限にあるのではないでしょうか。ぐずぐずしていると子どもの方が新しい遊び方を発明し、新しい製作を創造し、新しい歌を歌うでしょう。